【研究論文】

韓国人留学生のライフストーリーに見る英語と日本語の価値

中山　亜紀子 *

概要

日本の大学の国際化に伴い，英語を外国語として学んでいる国の留学生が，日本語ができるのにも関わらず，英語でのコミュニケーションを好む状況が散見されるようになった。なぜ英語でのコミュニケーションを好むのか。それを理解するために，英語を話す場と日本語を話す場でどのようなアイデンティティが構築されているのか，日本語を専門としている韓国人交換留学生（キムさん，仮名）のライフストーリーを用いて考察した。英語は「世界中に友達を持っている人」としてのアイデンティティと結びつき，母語話者規範を超えて，彼の意図を伝えることができる混交的なリンガフランカであった。一方日本語は「日本社会のルールを学び，それに合わせる人」としてのアイデンティティと結びついていた。英語がヘゲモニーを持つ時代における多言語化したキャンパスでの学びをより詳細に考察する必要性が示唆された。

キーワード

留学生，留学，ライフストーリー，リンガフランカ，アイデンティティ

1. グローバル化する世界と日本留学

人の移動，物の移動，資本の移動を意味するグローバリゼーション（吉野，2014）は，インターネットの普及をともなって，かつてない勢いで世界中で進行しており，人々がいつ，誰と，どこで，どのような手段を用いてコミュニケーションを行い，そして学ぶのか，言語使用と学習の風景を一変している（The Douglas Fir Group, 2016；青木，2016）。これらの動きの中で，世界での留学生数の増加も著しい。UNESCO の調査によると，2016 年に学位の取得を求めて国境を移動した学生の数は 400 万人をはるかに超え，ほぼ 200 万人だった 2000 年の 2 倍以上となっている（Chien, 2016）。ここに，学位の取得を求めない交換留学[1]，商業ベースの語学留学を入れると，非常に多くの若者が海外で学ぼうとしていることがわかる。

このような留学生の増加は，多くの留学生を受け入れることで，国際的な大学ランキングを上げたいという大学側の思惑（Kubota, 2016），および実際は成功ばかりではない留学に一定の期待を寄せる社会的想像力（Social Imaginary）（Kubota, 2016）と無関係ではないが，英語が国家語や公用語として使われず，外国語として教育されている「拡張円」の国々（久保田，2015a）でも，留学生を引き付けるため英語によるプログラムが提供されていることが注目される。日本の大学でも，大学教育を英語化すること（庵，2017）が推進され，英語による短期留学プログラムだけではなく，英語を使用言語とした学部も設置されている。それとともに，日本語ができない留学生のために，キャンパスを多言語（多くの場合，日本語と英語）化すること（野原，2009）が進められ，日本の大学の中では，英語さえできればある程度の情報が得られ，学業も達成できるという状況が生まれつつある。この状況の背景には，英語に対して国際的なリンガフランカという位置を与えて

* 広島大学教育学研究科
（E メール：akknkym@gmail.com）

1 EU のエラスムスプログラムを例に挙げると，発足当初の 3,244 人（1997 年）から 2013 ～ 2014 年度は 27 万人へと増えている。

いる言語イデオロギー[2]（小山，2011）がある。

これに関わる現象として，日本の大学のキャンパス内で，中国，韓国など「拡張円」の国々からの留学生が，日本語能力が高いのにも関わらず，母国の学生たちだけではなく，英語を使ったネットワークに多くの時間を使う例が散見されるようになった。日本語ができる留学生は，日本語と母語でコミュニケーションを，日本語ができない留学生は，英語と母語でコミュニケーションを行っている（Simic, Tanaka, Hasegawa, 2006）[3]という従来の前提が崩れてきていると言える。このように英語が共通語として広く使われていない国への留学において，英語，現地の言葉（本稿の場合は日本語），母語の3言語を使用することについては，あまり注目されていない（Llanes, Arnó, & Guzman, 2016）。

本稿で紹介する韓国出身の短期留学生であるキムさん（仮名）も，日本語専攻でありながら，英語を使うコミュニティに多くの投資をしていた留学生の一人である。キムさんのような留学生の出現は，いくつかの問題を提起する。一つは，誰が誰と何語を使ってコミュニケーションしているのかという記述的な問題であり，次に，それはなぜなのかという解釈的な問題である。なぜ，キムさんは，日本の大学で英語を使うことに惹きつけられたのかをキムさんの視点から理解し，そこからグローバリゼーション時代の留学，日本語教育を考えたいというのが，本稿の意図である。キムさんとのインタビュー調査をもとに，彼の過去から現在までのライフストーリーを作成し，そこに読み取れる彼の複数のアイデンティティと，日本語および英語の意味について考察した。

キムさんは，日本の山下大学（仮名）に半年間留学した。その後韓国の母校で半年過ごした後，再び留学し，夢野大学で1年の交換留学に参加している。夢野大学入学前に日本語能力検定試験N2に合格している。筆者[4]がキムさんに興味を持ったのは，キムさんが日本語上級者のためのプログラムに在籍していながらも，他の韓国人留学生よりはるかに，英語を使うコミュニティへ積極的な投資をしていたからだ。

2. 留学生のアイデンティティ研究

留学という経験は，「自分は誰なのか」という認識に大きな変化を与える「決定的な経験（critical experience）」である（Benson, Barkhuizen, Bodycott, & Brown, 2013）。自分でできることが制限されてしまい自己効力感に影響がある（Aveni, 2005），ジェンダーや人種，国籍，年齢などの個人的特徴が特別な意味を持ってしまう（Kinginger, 2009），継続して第二言語に晒されるという体験などがアイデンティティの変化（学習者から使用者へ）をもたらす（Benson et al., 2013）という。また，インターネットが普及し，現地に行かずとも多様な映像や情報に接することができるようになっても，他文化，他言語を理解する最適な方法と考えられている（Kinginger, 2015）。

留学生の言語学習についての研究は，Kinginger（2015）によると，半年や1年間の短期留学生と，その間，留学に行かなかった学生たちの言語能力の伸びの差異を量的に明らかにする目的で始まった。以来，様々な言語面の伸びの研究が行われているが，留学はすべての言語面での能力を伸ばしているという。しかしながら，その伸びの個人差は非常に大きい。その原因の一つとして，受け入れ社会において，留学生のジェンダー，国籍，年齢などが留学生の母国とは異なって扱われることが挙げられている。例えば，Polanyi（1995）は，ロシアに留学した北米の学生の言語能力の伸びを調べ，男子学生は話す能力が伸びたのに対して女子学生は伸びていないことを見つけた。ダイアリースタディを詳細に分析すると，男子学生がロシア人女性と会話しているとき，女性は男子学生の話を聞いてくれたが，女子

2 小山（2011）は，「人びとが言語について意識化していること，つまり，ことばについて我々が考えていること」と言語イデオロギーを定義している（p. 4）。

3 隈本・ヒーリー，南里（2009）には，英語が苦手なため，短期留学プログラムの韓国人留学生は，英語を話す欧米からの同じプログラムの留学生や中国からの留学生とは交わらず，韓国人留学生だけで固まっていることが報告されている。

4 筆者は夢野大学で日本語教師として，またキムさんが在籍したプログラムの担当者として勤務していた。

学生がロシア人男性と話す時には，一方的に話を聞かされることが多く，話す練習になっていないことがわかった。これは，ロシアにおける男女の話し方のパターンが留学生との間にも用いられた結果，男子学生は話す機会が多く，女子学生は少なくなったのだった。また，Block（2007）は，ヨーロッパに留学したアメリカの留学生が，現地の学生からアメリカ政府の姿勢を批判される，自分の政治的立場を明らかにしたことで不愉快な議論に巻き込まれるなどしたため，結局，受け入れ国に対する不満を強め，非常に愛国的になって帰国した例を報告している。ホスト社会だけではなく，留学先の現地語教室での年齢やジェンダーの扱われ方（Brown, 2016）ホストファミリーで子供扱いされて単純な会話しかできない環境（Kinginger, 2009）などホスト社会と留学生の接点で，留学生のアイデンティティが交渉され，その交渉の結果が留学の成否に影響をしているという。

ここでいうアイデンティティとは，ポスト構造主義的なアイデンティティ観であり，ある人に本質的に備わり，統一し安定したものではなく（Norton, 2013），対話者やコミュニティの中での交渉やその人の立場によって変わりうるもの（Pavlenko & Blackledge, 2004）である。日本語の文献でも，このようなアイデンティティ観を使った留学にかかわった研究は，留学生の職場でのアイデンティティ構築に注目したもの（横須賀，2015），留学生の友人とのネットワーク形成に注目したもの（中山，2007）などが挙げられ，学習者個人とホスト社会との関わりへの注目が高いという特徴がある。しかし，アイデンティティは本来的には，「自分とは…である」の…にあたる部分（ガーゲン，1999/2004，p. 64）であり，ある場所で構築されたアイデンティティの当人にとっての意味は，個人史を参照することなしには，明らかにすることはできない（中山，2016b）。特に，母国とホスト国双方に参照項をもつ留学生の場合，母国において，そのアイデンティティがどのような意味をもつのかを参照にする必要がある（當間，2002；Shin, 2014）。つまり，その意味とは，対話者との関係のみでなく，その人が生きる家族，コミュニティ，社会，文化などを含む言説との関係によって変わる多層的なものだと言いかえることができる。本稿で用いるライフストーリーは，ある場所で構築されたアイデンティティの意味を個人史的に位置づけ，多層的な意味を持つアイデンティティにアプローチできるところに，その長所がある。

本稿では，韓国と日本それぞれでキムさんが構築した，あるいは構築したいと考えている複数のアイデンティティを読み取り，それぞれのアイデンティティにとって英語，日本語がもつ意味を考察する。次いで，日本における日本語と英語の使用について取り上げる。

3. 調査及び方法論

3. 1. インタビュー

インタビューは，私の研究室で行った。二人ともキャンパス近くに住んでおり，静かで，インタビューをしていることを他の人に見られにくいことも，場所を選択した理由だ。インタビュー開始時に，このインタビューの目的，予想されるインタビュー回数，ストーリー確認のお願いとともに，倫理的事項（いつでも協力をやめることができること，答えたくない質問には答えなくてもいいこと，過去を思い出して辛くなることがある可能性など）を口頭で説明した。文書によるサインを求めなかったのは，教師と学生という力関係がこのインタビューを規定している上に，文書で確認することで，彼らにインタビューからの離脱ができないかのような印象を与えることを恐れたためだ（桜井，2012）。インタビューでは，お茶などを飲みながら，リラックスした雰囲気を心がけ，キムさんの話の流れを損なわない程度に質問をして，私の理解を確保したり，話を促したりした。インタビューはキムさんが帰国後，スカイプを通じて行った1回を含め，合計3回行い，すべてキムさんの承諾を得て，録音した。録音された時間は，それぞれ1時間28分，2時間8分，1時間5分である。

インタビューは，ほとんど日本語で行われ，部分的に韓国語が混じることがあった。私が日本語から韓国語にスウィッチしても，キムさんは日本語で答え続けることも多かった。私の韓国語能力が低いことに加えて，キムさんがこのインタビューを日本語練習の一つと考えていたのではな

いかと考えられる[5]。

3. 2. 分析

データ分析には，魔法の方法はない（クヴァール，2007/2016）。分析は次の方法で行った。まず，インタビューのトランスクリプトを作り，話されたことが理解できるまで，読み込んだ。さらに，インタビューで話されたことを「出来事」ごとにわけ，時系列に並べ替えた。そして，出来事間を意味の連関（ブルーナー，1986/1998）で結び，つまり，現在の彼の姿を終点とした筋（リクール，1984/1988）をもとにしたストーリーを作った。筋が作れない時には，そのつながりについて次回のインタビューで質問を行った。ほとんどすべての出来事が繋がったときが分析の終了である。出来上がったストーリーをキムさんに見せて確認を取った。

ライフストーリーは，ある人の過去の体験についてのストーリーであり，その人が「何者であるのかを語る」自己アイデンティティ（ガーゲン，1999/2004）である。また，他者が過去の体験にどのような意味付けを与えるのか，語りの中から意味を解釈できる方法である（やまだ，2000）。その語り方や，語るべき内容，過去の出来事に意味を与える筋そのものが，歴史的，文化的，ジェンダーの影響を受けており（Pavlenko, 2007），同時にインタビュアーの影響を排除することはできない。しかし，他者の意味世界へ接近するためには，研究者自身の意味世界を通し解釈するしかない（Polkinghorn, 1988）。以下では，私が解釈し，理解したキムさんのストーリーを語る。このストーリーは，キムさん自身に確認をとったものである。私は韓国語と英語の学習者であり，日本語教師である。短期留学生に対する日本語教育に90年代後半から従事しており，英語ヘゲモニーが徐々に強化されてくることを感じられる立場にあった。今回，キムさんのケースを過去とは異なるものととらえたのも，日本語ができる留学生が日本語の世界よりも英語の世界に投資するのはなぜなのかという私の教師としての疑問に発端がある。

5 韓国の日本語教育事情の情報提供を行った際，私はキムさんの時間を取ってしまったことを謝ったが，その際「僕も勉強になります」とキムさんは答えていた。

3. 3. 韓国における英語教育／日本語教育をめぐる言説

ここでは，キムさんのストーリーの理解を助けるために，韓国における英語と日本語の位置について簡単に紹介する。

韓国内では学歴が社会的地位上昇を果たす手段の一つとして広く認識されており（有田，2006），IMF以降それが激化し（李，2014），点数による序列化を招いている（石川，2011）。韓国社会の教育熱のレポートは事欠かないが，「学歴＝経済的な上昇手段」言説が，実際の人々の行動に大きな影響を与えているといえる。

その中で，英語は特別な位置を占めている。大学入試，入社試験，入社後の昇進試験などで，英語能力は常に評価の対象とされ，「英語は，社会的地位の上昇を図る局面の多くで求められる，基本的能力と認識され」（松本，2007，p. 37）[6]る。そのために早期留学，英語村，塾，通信教育などに莫大な私教育費が費やされ（パウザー，2013），熾烈な競争が行われ（ノ，2012）ており，私教育費を費やせる家庭とそれができない家庭の間の格差が深刻な問題となっている。韓国の公教育では，英語は1997年以降，小学校3年生からの正規科目となり，様々な施策の形で拡大を続けている（国立教育政策研究所，2012）。英語が韓国内で使われることは，ほとんどない状況にもかかわらず，英語イマージョン教育が教育政策の大きな論点になっている場合すらある（Lee, 2010）。このような施策の拡大は，韓国政府が外国語教育として英語を重視していることとともに，公教育で英語教育を保障することで，格差是正を図りたい政府の思惑もある。本稿で紹介するキムさんは，1997年生まれで，この英語教育重視の流れの中で育った。

松本（2007）は，中高生を対象に，「英語ができれば社会的な成功を得ることができると思うか」という質問をしたところ，70％以上が同意

6 英語能力の重要性が認識されている中で，海外へ留学行く留学生の数は，2011年のピーク時には，28万人を超えている。さらに，英語への「イマージョン」と早期教育が，英語能力を育成する方法として考えられ，母親と義務教育途中の子供が英語圏の国に長期で留学し，父親は韓国に残って仕事を続け，送金をするという「キロギアッパ」が社会現象として注目されている（Lee, 2010；国立教育政策研究所，2012）。

したという調査結果を発表している。その理由として，第一は「世界中の人々と意思疎通ができる」「現代は地球村の時代だ」といった「意思疎通」「世界化」に関連付けられる回答が多く，次に「できなければ取り残される」「必須の技能だ」など就職のために必要という答えが多かった。つまり，英語学習を通して得られる社会的な成功とは，世界を舞台に（経済的な）活躍ができること，就活の成功と結びつけられて語られていることがわかる。

このような英語の興隆に対して，日本語は学習者数の減少が指摘されている（国際交流基金，2017）。韓国の日本語教育は，戦後1970年代に再開された当時から，日本語や日本文化を学ぶことによって，国や個人に経済的な利益をもたらそうという言語道具主義（久保田，2015b）に基づくものであったが（中山，2016a），上述した英語に対する傾斜や中国など韓国と経済的な関係が密接な国が現れた結果，日本語学習者が減っているのだ。ただし，近年，日本で就職を希望する学生たちが日本語を学ぶ傾向があり，日本語学習者数は，韓国内の状況に応じて変動している。英語とは異なり，日本語そのものへのイメージについての研究は少ない。

4. キムさんのストーリー[7]

キムさんは，韓国の地方都市に生まれた。キムさんの両親は「普通の韓国の親」と同じようにキムさんに「勉強してほしい」と思っており，小学5年生ごろから学習塾にも通い始めた。しかし，キムさんは「勉強が嫌い」で「お父さんお兄さんに，ぼく勉強好きじゃないと，ずっと」言い続けていた。成績は良いとは言えず，「40人中30位ぐらい」だった。「1000メートル走」で優勝したこともあり，運動には自信があった。運動の他には，本を読むのも好きだった。一時は運動で身を立てよう[8]と考えたが，両親に反対され，普通高校に通った。大学も両親が望んだため，公務員になるための勉強をする大学に入った。その大学を卒業しても本当に公務員になれるのは，一握りだ[9]。

筆者：よく大学行ったね。勉強嫌いだったのに。親に行けって言われて？
キム：公務員になってほしいと親にいわれて，はいそうしますと。夢もなかったんです。高校の（時）までは。
（2回目インタビュー）

大学でキムさんは，勉強が初めて「面白い」と思った。「同じレベルの学生たちなので，ちょっと勉強しただけで，1番になることができた」し，親や教師からの強制がなかったからだ。奨学金がもらえるほど成績上位者になった。

大学1年を終え，兵役に行くため休学した。兵役では，寮に寝泊まりしながら，公務員の仕事を補助する仕事に就いた。そこでもキムさんは，疲れて寝ている同僚を横目に勉強を続け，英語の勉強が面白いと思うようになった。

キム：学生の時は外国語，好きじゃなかったんですけど，軍隊に行って，軍隊の中で好きになって。
筆者：ええ！そんなことあるの？
キム：ええ，遅かったんですけど，これからまだ若いだから頑張ろうと思って。
筆者：えー。
キム：他の外国語も勉強しようと思いました。
（1回目インタビュー）

韓国もグローバル化時代で，外国人も増えたし，世界で仕事をする時代だから，外国語を習わなければならないと思った。一般就職するときも，公務員になるためにも英語は重要な科目だ。その時は，試験でいい点数をとるための勉強を一生懸命

7 以下，ストーリーやインタビューの引用部分で太字で表しているのは，韓国語でキムさんが語った部分だ。引用部分以外でカギカッコを付けた部分はキムさんが話したままの言葉である。

8 韓国の体育教育は，スポーツエリートを育てるための教育が多く，スポーツ選手になることを選択した学生たちには勉強は期待されない（佐々木，n.d.）。

9 韓国で公務員になるのは，非常に難しい。例えば，警察公務員（巡査）の筆記試験には，1,100人の募集に対して3万9,140人の応募があり，その倍率は36倍。女性は117倍だという（イ，2017）。

していた。その頃は，勤務中に外国人に会っても，話さないで逃げていた。

兵役を通して，公務員の腐敗を目にしてしまった。将来，公務員になることに嫌気がさしたキムさんは，いったん入った大学を辞め，新しい大学に入ることにした。その時選んだのが外国語だ。外国語を選んだのは，仕事だけではなく，「遊びに行ったときも，もし友達作るときも，なんか本読むときも，日常生活でよく活用できて使用できるから」だ。それに外国語ができる人はかっこいい。

> うーんかっこいいですね。旅行に友達といっしょに行って，英語上手な友達は，外国人としゃべったり，笑ったり，通訳してあげたり，なんかうらやましい感じもあるし，かっこいいすばらしい感じもあるし。韓国語ではなく，外国の本も読めるし。
>
> （1回目インタビュー）

外国語の中でも英語は，どの進路を選ぶにしても「勉強を続けなければならない」。英語＋アルファの価値を持ち，就職に有利な日本語，中国語の中で，以下の理由に加えて日本に良いイメージを持っていたため日本語を選んだ。

> 日本語勉強する人は英語があまりできないです。それでもし日本語勉強する人が，英語，ちょっとだけでもできたら，就職するとき，あの他の人より上になります。それで，日本語ができて，英語も少しできたら，就職するとき役に立つと思います。
>
> （1回目インタビュー）

新しい大学では，「兵役中にやりたいと思っていたことを全部した」。勉強もその中の一つで，常に成績上位者であることをキープした。1年生の時だけ学科の学年代表（生徒会の役員のようなイメージ）もやった。サークルにも入った。偶然入ったそのサークルは「マルクスを読み」，労働運動を助けるサークルだった。

そこでの活動に参加したことを親に怒られたが，「ストをする人にもその人なりの理由がある」ということが理解できるようになった。会社の社長がストに参加した人を雇いたくない気持ちはわかるが，「私は社長になるから，もう公務員にもなりたくないから大丈夫。自分の言いたいことは言うべきだと今そう思って」いる。

キムさんは一生懸命勉強を続けたが，同級生は「中学生の時から漫画とか映画を見て，みんな話すのも上手でした。でも私，試験の点数は彼らよりいい成績をもらったけど，会話は全然できなくって，ああ，留学行こうと思って」協定校である日本の地方都市にある山下大学で，交換留学生として半年間留学することにした。

日本に来て一番最初に驚いたことは，路上駐車がないことだった。また，日本で財布を何回か忘れたが，すべて戻ってきた。「日本は確かに国民の意識もいい」と思う。

山下大学には，キムさんが参加した日本語のプログラムと英語のプログラムがあって，どちらも7，8人ずつ参加していた。英語プログラムの学生たちは，すれ違ったときキムさんが挨拶をすると，笑いながら返事をしてくれて，「性格がよく，元気」だった。反対に日本語のプログラムの学生たちは，家で勉強していたり，あまり外に出かけないような学生が多く，挨拶をしても恥ずかしそうにしている学生が多かった。キムさんは，短期留学生のための交流室にいるヨーロッパ人に積極的に声をかけた。

> 筆者：（ヨーロッパ人を）誘ったんだよね。
>
> キム：ああ，はい。誘いました。なんかヨーロッパ人たちは自分たちでカードゲーム，トランプとかしたりする時に，私もしたい，やってもいい？とか。僕たち（韓国人）が遊ぶ時，あの××ヤ（食堂）に行くつもりなんですけど，いっしょに食べないとか…。
>
> （2回目インタビュー）

ヨーロッパ人たちは，なぜかみんな「運動が上手」で，いっしょにトランプをしたり，食事をしたり，スポーツしている間に，自然にいっしょに遊ぶようになった。キムさんが英語を実際に使う初めての機会だった。

ヨーロッパ人たちは日本語ができないので，キムさんが体育館を予約して，みんなでバレーボール，テニス，卓球をしたりした。サッカーもやった。日本語プログラムの韓国人だけでなく，山下大学の国際交流サークルの日本人も，キムさんが

誘って，いっしょに遊べるようにした。

> 私がよく遊んで，あの他の韓国人二人いっしょに誘いました。いっしょに遊ぼう。私がサッカーとかバレーボールとか好きで，いっしょにしようと誘って。私のせいだというかおかげさまだというか，みんな遊ぶようになりました。（第１回インタビュー）

また，飲み会をすることも多く，キムさんの部屋やヨーロッパ人の部屋で飲んだりした。キムさんは酒が強くて，いっしょに飲めることも楽しかった。最初は，「ただ遊ぶだけ」だった。たくさん間違えたが，間違えながらもいっしょに遊ぶだけで英語の会話が「どんどん上手にな」っていった。

筆者：キムさんも飲むのかな？飲むの好き？
キム：はい好きです。特に外国人と飲むのが好きです。それはなんか遊びだけど，勉強になる。なんか外国語を使うから，そして授業の中には習えない言葉とか，悪い言葉もあるんですけど，日常生活に使う言葉を習うことができるので，それがよかったと思います。
（第２回インタビュー）

ヨーロッパ人たちはなぜか，全員ネイティブのように英語ができた。キムさんは，自分が英語が上手ではないことを自覚して，英語の勉強にも本当にまじめに取り組むようになった。

キム：私が下手だけど通訳してあげて，それがちょっとうれしくって，もっと頑張ろうと思って，韓国で勉強した本を読みながら，それを勉強して，また会った時，勉強した文章を使ったりしました。
筆者：ふーんそれは会話とか，会話が書いてある，会話の仕方が書いてある本？
キム：会話の本ではなく，1000 文章が千。千個の文章が書いてある英語の本でした。
（第１回インタビュー）

ヨーロッパ人とはいっしょに東京旅行にも行った。そこでは，ポルトガル人やポーランド人と第二次世界大戦の頃の話をした。「本で読んだことをいっしょに，なんか遊びに行って，実際に聞く機会になって，遊びだったけどいろいろ勉強になりました。」

ヨーロッパの人たちと遊ぶようになって，気が付いたことがある。いっしょに遊ぶとき，飲み会のときの予約，会計，場所の提供などは，韓国人は嫌がる。友達がお金を払ってくれなかったり，片づけてくれなかったりしたら，面倒だからだ。でも，ヨーロッパ人は，自分から「私がする」と言った。

キム：（ヨーロッパ人たちが）飲み会が終わったときも，ちゃんと片づけて，皿とか洗ったり。
筆者：ヨーロッパ人も洗ったんだ。日本人だけじゃない。
キム：その時に，ポーランドの女の子たちが，お好み焼きつくるイベントで，みんな遊んでいるとき，自分が音楽をなんか携帯で音楽を
筆者：かけて。
アン：はいかけて，皿を洗いながら洗うことをみて，偉いなと思いました。
（2 回目インタビュー）

夢野大学のパーティーなどでも思うのだが，ここでは，友達同士で，誰かが命令するわけでもないのに，イベントなどが回っている。韓国の大学で学年代表をした時の経験では，韓国では，先輩がとにかく命令しないと，物事が回らない。

国際交流サークルの日本人の学生たちとも，よくご飯を食べたりしたので，「ぜんぜんできなかった日本語が，少しだけ日常会話はできるように」なった。

キムさんは５か月の留学を終えた。

交換留学を終えてからも，英語の勉強は続けていた。*TIME* 誌を読む塾に行ったりして真面目にがんばった。一方，帰国してから韓国の変なところが目に付くようになった。韓国の大学生は知らない人となかなか友達にならない，一人で外食することがない，就職やテストの競争が異常に激しいなど，韓国での大学生活が嫌になってきた。山下大学での留学は短かったし，部活動にも入ってみたいという気持ちもあった。そこで今度は１年間夢野大学に留学することにした。

夢野大学では，親の反対を押し切って来たので，

経済的に苦しかった。アルバイトや株への投資でお金の工面をした。アルバイトはファーストフード店と観光案内所での通訳の仕事をした。バイトを通して日本語が上手になり，日本のシステムを理解する機会にもなった。

筆者：でも（バイトは）きつかった？
キム：ああきつかったんです。
筆者：あっそう
キム：はい，でも習ったこともいろいろたくさんあります。敬語とか。日本でのバイトは初めてやったから，ああこういうことが日本のバイトの時するんだとか。あのー韓国よりはルールは厳しかったけど，お客さんの立場で見るとすごくいいシステムだと思いました。
（第３回インタビュー）

それまでやってみたかった部活にも入った。日本の大学生活は韓国に比べて生活に余裕があると思う。また，アルバイトや授業で知り合った日本人の友達を作った。ここでも，英語を使う留学生の友達が多くできた。

筆者：どうやって知り合ったんだろうって思って（中略）。
キム：（知り合いの英語プログラムの友達といっしょにいると，英語を話す院生の留学生などと知り合える）。そして，すぐ私から声を出して挨拶するので，ちょっと友達になりやすかったです。私には。
筆者：ふーん，ふーん。そのキムさんが声をかける外国人って，どんな外国人？
キム：ヨーロッパ人，とか英語を使う人。
筆者：使ってそうな人？
キム：使いそうな人見つけたら，アー，ハローって挨拶します。なんか，韓国から来たけど，どこの出身？サッカーとかいっしょにしよう，パーティーとか，と言います。それで，今度，なんかイベントとがあればいっしょに，なんか私が誘ったり誘われたりして。
（第２回インタビュー）

夢野大学にはいろいろな国の人がいて，面白い。英語を使う友達と日本人の交流を目的として，いっしょに運動しないかと呼び掛けている。

キム：最近，スキー場に行きたくなって，みんな誘ってスキー場に行きます。
筆者：ああ○○（地名）？
キム：フェアウェルパーティーと，クロージングセレモニーが終わって，その次の日。何もイベントがない日。日本人５人と，タイ人[10]，インドネシア人，オーストラリア人，いろいろ行きます。12 人ぐらい。ドイツ人も二人。
筆者：それはだれが企画したの？
キム：私がみんなを誘いました。
（第１回インタビュー）

ここでも日本語を話す留学生より，英語を話す留学生の方が気が合う。恋愛の相談は，年上の中東出身の院生の留学生にしたし，いつも冗談ばかり言っている英語プログラムの院生もいる。英語を話す時は，年齢などを気にしなくていいから気楽だ。日本語を使うときは韓国語を使うときと同じように丁寧になってしまう。

筆者：なんか違う？英語をしゃべる時と日本語をしゃべる時と韓国語をしゃべる時と。
キム：違います。あー日本語はなんか礼儀だというか，人になんかやさしく，あ，すみませんとか，してくれて本当にありがとうございます，丁寧な言葉，だから私の体とかもこうやって（お辞儀をする）丁寧にしますけど，英語話す時は，もう年上の人にも Hey You こうしたり（肩をたたく様子）こうしたり，なんかジェスチャーが変わります。英語のほうがもっと仲いい感じです。
筆者：韓国語は？
キム：韓国語は日本語と同じです。それで英語がいいなと思っています今は。言語は英語が壁がない感じです。お互いに。
（1 回目インタビュー）

アジア出身の英語プログラムの学生で，日本語がある程度できる学生とは，英語と日本語を混ぜて話す。

キム：××（人名）としゃべるときは，たまに英語たまに日本語でした。

10 ここでは，人名で話しているが，国名に変えた。

筆者：ふーん。××とかと日本語しゃべる時と，日本人と日本語しゃべる時となんか違った感じがありますか？

キム：あります。××と日本語しゃべる時が，あの，全部理解できる簡単な日本語で，ちょっと話しやすいかったです。日本人と話す時は，たまにわからない単語もあるし，方言もあるし。でも日本人と話すときが勉強になりますね。××と話す時は100％理解できる単語で話しました。負担がなかったんです。

筆者：負担がなかった。うんうん，楽しさ的にはどう？

キム：××と話す時が楽しかったんです。なぜかいうと，いつも二人で冗談ばかりで，つまらないことをしながら，笑いながら。（中略）外国語使う時は冗談します。

筆者：それ（外国語というのは）日本語のこと？

キム：日本語も英語も

筆者：ああそうなんだ。韓国語ではそんな冗談言わない？

キム：するけど特に外国語使う時，もっとする気がします。

筆者：それわざとしているの？

キム：うーん，なんか韓国人とするときは普通の話，なんか普通の生活の実際に必要なことを聞いたり，必要なことを，お願いとか頼んだりするけど，外国語ではあんまりそういうことじゃなく，ただ挨拶で，仲いいなりたくて，なんか雰囲気をよくつく作れる表現をよく使うというか。はい，いつも外国人と話す時は，冗談ばかりした気がします

筆者：なんでだろうね　外国語で冗談多くなるのってね。

キム：そうですね。なぜするか，僕だけじゃなく，他の外国人も，日本人じゃなくて他の外国人のほうが冗談が多いと思います。××もいつも冗談ばかりで，中東の人も冗談ばかりで。（第３回インタビュー）

来てしばらくしてから，英語が上手な韓国人のかわいい彼女ができてしまった。彼女と過ごす時間が一番長くなってしまって，英語も下手になったし，外国人の友達と飲みに行く機会もあまりない。でも，アパートのことで問題があったときなどは，彼女に助けてもらった。「大変なとき寂しいときは韓国人（と会うのが）好きで，なんか運動とか遊びに行くときはヨーロッパ人が面白い」。

帰国したら，就職活動をして，半年後に卒業する。韓国人の同級生の中には，日本で就職したいと思っている子もいるが，キムさんは日本で住むつもりはない。日本はルールが厳しく「情がない」という感じがするし，韓国料理が「懐かしい」。でも，日本語専攻だから，日本語関連の会社に就職するだろうし，アニメや映画を見ながら日本語の勉強も続けようと思っている。日本語も英語もあまり上手じゃないので，もっと上手になりたい。日本語を専攻したことを後悔はしていない。なぜなら「日本はアジアで経済１位の国ですね。それで日本語が，今はまだわからないけど，将来に（キムさんが株を投資する時など）日本語が私に本当に役に立つと思」うからだ。

外国に住むのではなく，旅行やビジネスで世界中を行ったり来たりしたい。

> 外国語が専門ではない人は，旅行に行く時も私よりは難しいと思います。私はポルトガルに行っても，ドイツに行っても台湾中国に行っても，友達がいるから私行きます迎えに来てということができるから，どこでも旅行ができるだと思います。
>
> （1回目インタビュー）

英語さえできれば，外国人とコミュニケーションできるので，日本語が全くできなくなっても，いいと思う。

筆者：もし，英語が完璧にできるようになる，あなたの持っている日本語を全部奪います。その代わり英語を完璧にしてあげますよと言われたら，それでもいい？

キム：はい。英語完璧になったら，うん，はい。外国人とコミュニケーションほとんどできますね。英語が一番重要な言語で今の時代は。だいぶ，それができたら，そうしてもいいです。（1回目インタビュー）

帰国してから，夢野大学で知り合った日本人の学生がキムさんの大学に３週間程度の留学に来

た。キャンパスでその学生に会って，日本語で話していると，みんなが見ている。

キム：なんか大学の食堂で日本人の友達とご飯食べると，周りの人がなんかえっと見るんですね。日本語だから。それが気持ちいいです。
筆者：かっこいい人になってるじゃん。
キム：はい昔は，僕が逆に（あの人は）英語とか日本語できるんだと，他の人を見たんですね。でも今は僕ができるから，がんばったなと思います。　（第3回インタビュー）

しばらくは会社で働いてお金を貯め，それから証券会社を興すつもりだ。

5. 考察

以上，キムさんのストーリーを述べてきた。ストーリーでは，キムさんは二度の日本での留学を経て，韓国を相対化する視点を得，世界中に友達がいるアイデンティティを獲得した。以下では，キムさんのストーリーの中に見られる複数のアイデンティティを取りあげ，その特徴を考察し，それぞれのアイデンティティの構築に日本語，英語がどのような意味をもったのか考察する。

5. 1. 韓国内でのキムさんのアイデンティティ

5. 1. 1. 就職競争のランナーとしてのキムさんとアイテムとしての外国語

キムさんが来日してしばらくしたころ，私はキムさんと彼の同級生に，最近の韓国の状況について話を聞いたことがある。そこで私は初めて「N放世代」「ヘル朝鮮」という言葉を聞いた。「N放（棄）世代」とは，就職のために，恋愛，結婚，楽しい大学生活，友情，趣味，楽しい家族生活など数限りないものを諦め（放棄）ざるを得ない世代のことである。大学では相対評価で点数がつけられるため，友達にノートを見せたり，わからないところを説明しあったりすることはない。大企業に就職するためにはTOEIC900点以上必要である。それ以外の資格をとったり，留学することも履歴書に書き加えるために必要だ。あまりに厳しい競争社会である韓国を，自分たちで蔑んで呼んだものが「ヘル（地獄）朝鮮」である。キムさんは，韓国大学の先生が「あなたたちはヘル朝鮮を生きているんだよ，頑張って」と授業中に言ったのを聞いて，「どこの大学の先生が自分の国のことを地獄と呼ぶのか」と憤慨して語っていた。

このような社会の中で，キムさんは，幼い頃から「ボクは勉強が好きじゃない」と両親に伝えたり，自分が得意な運動で身を立てることを考えたりと，この競争から距離を置こうとしていた。結局彼は親の意向に逆らえず，大学に進学したが，そこで思いがけないことに，勉強に興味が出てきた。キムさんは，親や教師からの強制ではなく自分の意思で勉強ができること，また努力が報われて点数が取れることの二点を興味の理由として挙げた。

ここでの勉強とは，点数を上げるための「勉強」である。言い換えれば，競争の中で他者から価値があると認められるための勉強である。韓国社会を覆う競争に参加することを嫌がっていたキムさんは，一つ目の大学での成功体験を経て，競争に積極的に参加することにしたのではないか。私は彼のこのアイデンティティをランナーと呼びたい。軍隊期間中に進路を変えることを決意したキムさんは，新しい専門として日本語を専攻することにしたのだが，その選択には，競争社会の中での有用さが基準となっていた。英語は競争を勝ち抜くための必須アイテムである。しかし，競争に後から参入したキムさんには英語アイテムだけでは勝ち抜くことは難しい。英語プラスαの価値をもたらすものとして中国語と日本語が選ばれ，ライバルである日本語専攻の学生の英語能力を見極めたうえで，日本語が選ばれた。キムさんにとって，日本語は，競争を勝ち抜くためのアイテムであり，アイテムの価値は点数によって測られるのだ。キムさんにとって，英語も日本語も道具的価値を持っていたといえる。

韓国の競争社会を走り抜くランナーとしてのキムさんは，現在も走り続けている。二度の留学を経て，日本語も英語も上手になったが，点数を取るための勉強を止めるわけにはいかない。走り続けるキムさんは，ストーリーから消えることなく存在している。

5. 1. 2. 韓国ではない世界とつながり「かっこいい」キムさんと外国語

日本語を専門として大学に入り直したキムさんは努力を重ね，優秀な成績を修めたが，会話は幼

い頃から日本語に親しんでいる同級生にはかなわなかった。キムさんの留学の目的はあくまでも日本語の会話力を伸ばすことであり，この時点において，日本語の「アイテム」としての位置は，大きく変わってはいない。しかし，キムさんにとっての外国語の意味はこれだけではない。

彼は外国語を選択した理由として，経済学などとは違い，読書，映画などの日常生活でも使える能力としての価値を挙げていた。さらに，外国語を選択することによって外国旅行で案内してくれる友人が増えると述べている。外国語を学ぶことは，韓国語の世界ではない「世界」，具体的には，読書や映画などの情報，韓国では接触できない人などとつながっていた。そして，彼は外国語でコミュニケーションできる人のことを「かっこいい」と思ったと述べている。

Philler & Takahashi（2006）は，言語学習に対する動機を「欲望」と呼び，「公的言説というマクロの言説と個人的経験というミクロの領域の対話的関係によって構成されるもの」（p. 59）と述べている。キムさんの外国語に求めた「就職の成功」と「外国とつながること」の二つは，3．であげた韓国の高校生があげた英語に対するイメージと符合している。外国語学習にキムさんが求めたものは，経済的な安定という言語道具主義だけではなく，世界とつながるかっこいい人になるという「欲望」にもつながるものだった。

5．2．日本での体験と世界中に友達のいるキムさん

さらに，二度の留学を経てキムさんは，「世界のどこに行っても友達がいる」アイデンティティを語った。山下大学では，元気に挨拶してくれる「ヨーロッパ人」たちと，夢野大学では，短期留学生，院生を問わず英語を話す留学生たちとキムさんは友達になった。キムさんは，日本語を話す留学生たちや，日本人たちとの付き合いよりも，英語を話す留学生たちとの付き合いを好んだのだが，その特徴として彼のコミュニケーションストラテジーや文化資本が認められたことがあると考える。

キムさんは充分な英語能力があったから，英語を話す留学生たちと友達になれたわけではない。自ら話しかける，友達になりたいという意思を明確に示す，食事に誘うなどのコミュニケーションストラテジーを発揮している。また，日本人社会との仲介役を買って出ることで他の人には真似のできない位置をグループの中で占めている。キムさんの積極的な働きかけで友だちになった「ヨーロッパ人」や「英語を話す留学生」たちの中で，韓国の競争社会の中では，充分に価値が見出されなかった「運動が得意なこと」，「世界のことに興味があること」が大いに役に立ったことは，注目に値する。また「日本語」という文化資本があることによって，彼は，このコミュニティの中で独自の地位を占めることができた。これらキムさんの文化的資本（Norton, 2013；中山，2016b）の価値が十分に認められることは，彼が英語を話すコミュニティに積極的に関わる理由となったことだろう。

ここで彼が英語を話す留学生と付き合いは，「遊びだったけど，いろいろ勉強になりました」とキムさんが述べていることに注目したい。この言葉の中の「勉強」とは，テストでいい点をとって競争社会を勝ち抜くための「勉強」とは質が違い，何の役に立つのかは明らかではない知識である。インタビューでは，悪い言葉，世界史的知識，皿洗いなども含め韓国人とは異なる人付き合いの仕方などが挙がっていた。キムさんは，英語を話す留学生たちと付き合うことで，韓国の中では得られない情報や人とのつきあい方を学んだ。台湾，ドイツ，ポルトガル，インドネシア，ベトナム，ブラジル，エジプト，チュニジア，スロベニア，アメリカと彼が英語を話す人として挙げた留学生の出身国は世界各地にまたがっている。山下大学，夢野大学という日本の大学での留学を経て，キムさんはこれらの留学生たちとのつながりを作り，世界中に友達がいるキムさんになったのだ。

加えて，英語を話す留学生と付き合うことは，彼のランナーとしての価値を高めることとも無縁ではない。英語の会話能力が上がっただけではなく，山下大学でヨーロッパ人との付き合いを契機として，英語の点数を上げるための「勉強」にもより一層，積極的に取り組むようになっていった。留学を通して，世界から日本に来た人々と知り合うことは，彼が外国語学習を通して得たいと考えていたアイデンティティに接近することを可能にしたのだ。

またこのことは，韓国内での競争では後発組だった彼への他者からの視線を変化させる。夢野

大学での留学を経て，キムさんは外国語を外国人と話す「かっこいい」人になった。キャンパス内で日本人留学生と日本語で話しているキムさんを，他の学生たちが称賛や憧れの入り混じった視線で見る。かつて彼があこがれ，そして今はあこがれの対象となった「韓国ではない世界とつながるキムさん」になったのだ。

5. 3. キムさんにとっての日本語と英語

上述したように，ランナーとしてのキムさんにとっては，英語および日本語は，就職に役立ち，社会的上昇を可能にするスキルとして，「かっこいい」キムさんにとっては「韓国ではない世界につながる」ことを約束するスキルとして価値をもっていた。だが，日本語と英語が同じ重さを持っているわけではない。「英語が完璧だったら，日本語はしなくてもいい」という日本語教育者にとって衝撃的な彼の言葉は，彼が自発的に述べたものではなく，筆者の質問に答える形で述べたものではある。彼は，夢野大学でわざわざ日本語を媒介語として用いない外国人教師の英語の授業を取り，そこでの宿題として現代語に書き直された英語の古典を多読し，それを「面白い」と語っていた。一方，彼は日本語の授業には参加しており，映画の原作を漫画にしたものを買ってはいるものの，読んではいない。将来は，証券会社を起業すると言っているキムさんにとって，日本語はどのような意味があるのかという疑問がわいて，筆者は上のような「もし英語が完璧だったら」という究極の選択を彼に強いてしまった。

ここでは，キムさんがなぜそのように答えるに至ったのか，英語と日本語の使用エピソードから，その問いに答えよう。

5. 3. 1. 英語

キムさんとのインタビューを振り返ってみて，一番に気づくのは，日本語と比べて，英語を使ったエピソードが多いこと，そして英語を使った友達付き合いの楽しさである。英語での友達付き合いの中で，彼自身の価値と役割を見つけ，そして韓国では得られない情報を得たり，人との付き合い方を知ったりしたことが，上述のように彼が英語の世界へのめり込んだ理由の一つだと考えることができる。また日本語を話す人々との大きな違いとして，英語グループには，英語母語話者がほとんどいなかったことが特徴として挙げられる。山下大学の英語グループには英語母語話者がおらず，夢野大学にも英語母語話者は，1人あるいは2人しかしなかった。つまり，ここでの英語とは，「異なる言語的バックグラウンドを持った個人が使うことができ，ホストコミュニティでの主流の言語とは異なる言語」（Block, 2007, p. 231）であるリンガフランカだったのである。

キムさんが「楽しい」と語り，投資した英語を使ったコミュニケーションについて，キムさんは「冗談ばかり」と述べている。リンガフランカとしての英語を使った会社内でのコミュニケーションを研究したStark（2009）は，リンガフランカにおける冗談の機能として，グループとしての結束を固め，所属感を養成する機能があるとし，さらに，文化的な知識に基づくのではなく，文脈依存的な冗談が，素早い機転と少々の皮肉をまぜて使われることを指摘している。キムさんは，夢野大学で中東出身の大学院生との英語での会話内容について，あまり内容がないことも述べているが，このようなリンガフランカとしての英語を使うことによって，日本語母語話者と日本語で話すコミュニケーションとも，韓国語話者との韓国語によるコミュニケーションとも違う「面白さ」感じた。

さらにキムさんは，英語によるコミュニケーションを「自由だ」と述べている。友達の肩をたたきながら，「Hey, You!」というキムさんの英語使用のエピソードは，英語の母語話者規範からは逸脱したように見える。佐藤（2015）は，複言語・複文化主義が内包する言語（例えば日本語）を明確な境界を持ったものとして実体化する言語観を批判し，言語使用とは，常にクレオール的であるとする細川（2006）を紹介している。

> そのコミュニティの中では，それぞれぞれ背景の異なる言語を持ちつつ，新しい言語を形成していくプロセスが生じる。このとき，それぞれの個人の使用する言語の活動は，いわばクレオール化した状態で流動的な相互作用を起こす（細川，2006，p. 1）。

キムさんの「Hey, You!」というフレーズの使用を，母語話者の使い方とは異なるが，リンガフランカが生んだ親密さを示すクレオール的なフレーズだと考える時，「様々な文化言語背景を

持った個人が色々な言語資源を使用しながら，日常生活を営」（佐藤，2015，p. 5）むコミュニケーションが見える。身振り手振り，表情，さまざまなストラテジーも含めて，コミュニケーションしようとする即興的でブリコラージュ的な特徴を，キムさんは「自由」と呼んだのではないか。

5. 3. 2. 日本語

それに対して，彼は日本語使用に自由を感じていない。日本語を話す留学生たちとはあまり気が合わないと感じたキムさんは，バイト先や部活，あるいは国際交流サークルの学生たちなど，主に日本語母語話者たちと日本語を話した。そこで話されている日本語とは，「敬語」や「方言」が混じったもので理解が難しかった。またそこで学んだこととは，「日本のシステム」であった。キムさんは「厳しすぎる」と感じながらも日本のルールを守ったり，「丁寧で距離がある」と感じながらも敬語を話そうとしていた。つまり，キムさんは，「日本のシステム」や「母語話者の話す日本語」を自分の働きかけによって変えられるものではなく，従わざるを得ないものとして受け入れようとしていたのではないか。日本語は，彼が理解できない土着のシステムをキムさんに強いる言語だと言い換えてもいいかもしれない。

これを日本におけるキムさんの英語と比較してみよう。キムさんにとって，英語は母語話者の規範に拘らないリンガフランカであり，わかりやすい。また冗談を言い合いながら笑いながら話す。そしてその話者は世界中から日本に来た一定の知的経済的水準をもった留学生である。一方，日本語は母語話者の規範を気にして敬語を使ったり，丁寧に話したりしなければならない。キムさんにとって理解しがたい習慣でも従わざるをえない。誤解を恐れずに言えば，キムさんは，日本という場所にいながらも，世界各地からの留学生とクレオール的なリンガフランカとしての英語[11]を使うことによって，土着の日本語／日本に繋がれることなく，世界のアカデミックな世界を飛ぶ留学生たちの仲間になったと言えるのではないか。

6. 今後の課題

以上，キムさんのライフストーリーを通してみた彼のアイデンティティと日本語と英語の意味を考えてきた。キムさんは韓国では「就職競争のランナー」であり，「外国とつながるかっこいい人」を夢みていた。山下大学と夢野大学で「世界中に友達がいる」キムさんとなり，帰国後は，「外国とつながるかっこいい人」になることができた。これらのアイデンティティと，日本語も英語も結びついているが，日本における日本語と英語の使用を見ると，日本語を使用したコミュニケーションにおいては，キムさんは母語話者規範を受け入れざるを得ない立場におかれ，日本というローカルな場所に縛り付けられるのに対して，英語では特定の場所に縛られることなく，文字通り世界中から山下大学や夢野大学に集まり学ぶ人々と付き合うことができた。今後詳細な検討が必要だが，日本に留学してもなお，英語は国際的な言葉であるという韓国内の英語に対するイデオロギーを，キムさんは自分の体験を通して強化していると考えることができる。

それにしても，なぜキムさんは英語には自分の意図をのせることができて，「自由」であったのに，日本語では自由ではなかったのだろうか。キムさんの例から，私は母語話者のルールを言語学習者に教え込むことの限界を見る。キムさんのように日本語母語話者の規範を一方的に受け入れようとすることが，結局は異言語を使ったコミュニケーションの楽しさを減じる結果になっているのではないか。佐藤（2015）は，「社会参加をめざす日本語教育」として，「（コミュニティのルールを）単に通例として受け入れるのではなく，批判的に考察し，説得したりされながらいいと思うものは受け継」ぐ必要性を述べている。「英語＝リンガフランカ」言説の中で，日本語教育をはじめとする外国語教育は何ができるのか考える時，言語学習，教育のゴールを根本的に捉えなおす必要があると思える。

11 ここで「英語」とキムさんが呼んでいるが，本当に「英語」のみを使うコミュニケーションであったのかどうかは，より一層の検証が必要である。尾辻（2011）はオーストラリアで，英語や日本語を混交して話す職場の例を紹介している。キムさんと英語を話す留学生たちの間でも，日本語や他の言語も使用されていると推測されるが，それは記述的な研究を俟ちたい。

文献

青木直子(2016). 21 世紀の言語教育 ── 拡大する地平，ぼやける境界，新たな可能性. Journal CAJLE, 17, 1-22.

有田伸（2005).『韓国の教育と社会階層 ── 「学歴社会」への実証的アプローチ』東京大学出版会.

庵功雄（2017). 大学における英語中心主義を生き延びるための留学生日本語教育と〈やさしい日本語〉『言語文化教育のポリティックス ── 言語文化教育学会第 3 回年次大会予稿集』(pp. 2-3).

石川裕之（2011).『韓国の才能教育制度 ── その構造と機能』東信堂.

尾辻恵美（2011). メトロリンガリズムと日本語教育 ── 言語文化の境界線と言語能力『リテラシーズ』9，21-30.

イ・ジョンファ（2017 年 6 月 1 日).【中央時評】良質の雇用をしっかりと増やす＝韓国（2）『中央日報日本語版』. https://japanese.joins.com/article/j_article.php?aid=229671

ガーゲン，K. J.（2004). 東村知子（訳)『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版.

河先俊子（2013)『韓国における日本語教育必要論の史的展開』ひつじ書房 .

久保田竜子（2015a). 奥田朋世（監訳)『英語教育と文化・人種・ジェンダー』くろしお出版.

久保田竜子（2015b). 奥田朋世（監訳)『グローバル化社会の言語教育 ── クリティカルな視点から』くろしお出版.

隈本・ヒーリー順子，南里敬三（2009). 多文化環境のキャンパスにおける留学生と日本人チューターと異文化接触. 萬美保，村上史展（編)『グローバル社会の日本語教育と日本文化 ── 日本語教育と多文化共生リテラシー』(pp. 228-249）ひつじ書房.

クヴァール, S.（2016). 能智正博, 徳田治子（訳)『質的研究のための「インタ・ビュー」』新曜社.（Kvale, S. (2007). *Doing interviews*. Thousand Oaks CA: Sage.）

国立教育政策研究所（2012).『未来の学校づくりに関する調査研究報告書』. http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h24/report_list_h24_5_3.html

国際交流基金（2017).『海外の日本語教育の現状 ── 2015 年度日本語教育機関調査より 』https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey15.html

小山亘（2011).『近代言語イデオロギー論 ── 記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史』三元社.

桜井厚（2012).『ライフストーリー論』弘文堂.

佐々木邦彦 (n.d.).『韓国の学校体育』笹川スポーツ財団研究レポート. http://www.ssf.or.jp/topics/external/tabid/743/Default.aspx

佐藤慎司（2015). 社会･コミュニティ参加をめざすことばの教育とメトロリンガル・アプローチ ── 複言語・複文化主義をこえて『リテラシーズ』16，1-11. http://literacies.9640.jp/vol16.html#sato

當眞千賀子(2002). 問題系としての実践コミュニティ ── アメリカの小学校の中の日本人. 田辺繁治, 松田素二（編)『日常的実践のエスノグラフィ ── 語り・コミュニティ・アイデンティティ』(pp. 118-141）世界思想社.

中山亜紀子(2007). 韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴 ── 「自分らしさ」という視点から『阪大日本語研究』19，97-127.

中山亜紀子（2016a). 韓国人日本語教師の現状理解と日本語教育の課題『佐賀大学全学教育学紀要』4，71-83.

中山亜紀子(2016b).『「日本語を話す私」と自分らしさ ── 韓国人留学生のライフストーリー』ココ出版.

野原佳代子（2009). キャンパスの多言語化と日本語の多様化『日本語学』28(5)，196-206.

パウザー, R.（2013 年 11 月 19 日).【コラム】英語をスペックから解放させろ＝韓国日本語版『中央日報日本語版』. http://japanese.joins.com/article/481/178481.html

ノ・ヒョンウン（2012 年 6 月 4 日). J.S（訳)‘階層間はしご’遮る障害物…‘英語成績’が最も深刻『ハンギョレ新聞日本語版』. http://japan.hani.co.kr/arti/politics/11704.html（原文韓国語，2012 年 6 月 4 日）

ブルーナー，ジェローム（1998)『可能世界の心理』みすず書房.

細川英雄 (2006). 日本語教育クレオール試論『早稲田大学日本語教育研究』9，1-8.

松本麻人（2007）．韓国社会における英語熱と学校教育『BERD』8，36-41.

やまだようこ（2000）．人生を物語ることの意味――ライフストーリーの心理学．やまだようこ（編）『人生を物語る――生成のライフストーリー』（pp. 1-38）ミネルヴァ書房.

横須賀柳子（2015）．職業探索段階の留学生によるアイデンティティ変容――日本企業でのインターンシップ参加者の事例から『言語教育研究』5，59-77.

吉野耕作（2014）．『英語化するアジア――トランスナショナルな高等教育とその波及』名古屋大学出版.

李恩珠（2014）．韓国社会の学歴主義と私教育熱――1980 年代の経済危機以降の動向に焦点を当てて『早稲田大学大学院教育学研究科紀要：別冊』21(2)，201-211．http://hdl.handle.net/2065/41341

リクール，P.（1998）．久米博（訳）『時間と物語 2――フィクション物語における時間の統合形象化』新曜社．（Ricœur, P. (1984). *Temps et récit (Tome II): La configuration dans le récit de fiction*. Le Seuil.）

Aveni, V. P. (2005). *Study abroad and second language use: Constructing the self*. Cambridge: Cambridge University Press.

Benson, P., Barkhuizen, C., Bodycott, P., & Brown, J. (2013). *Second language identity narratives in study abroad*. NY: Palgrave Macmillan.

Block, D. (2007). *Second language identities*. NY: Continuum.

Brown, L. (2016). An activity-theoretic study of agency and identity in the study abroad experiences of a lesbian nontraditional learner of Korean. *Applied Linguistics, 37*(6), 808-827. doi:10.1093/applin/amu075

Chien, C.-L. (2016). *What you need to know about data on international students?* アジア学生文化協会特別セミナー「国際学生流動性の潮流と動向を探る」資料．https://www.abk.or.jp/photonews/1601.html

The Douglas Fir Group (2016). A transdisciplinary framework for SLA in a multilingual world. *The Modern Language Journal, 100*, 19-47.

Kinginger C. (2009). *Language learning and study abroad: A critical reading of research*. Houndsmills, Basingstoke, UK: Palgrave/Macmillan.

Kinginger, C. (2015). Student mobility and identity-related language learning. *Intercultural Education, 26*(1), 6-15. doi:10.1080/14675986.2015.992199

Kubota, R. (2016). The social imaginary of study abroad: complexities and contradictions. *The Language Learning Journal, 44*(3), 347-357. doi:10.1080/09571736.2016.1198098

Lee, J. (2010). Ideologies of English in the South Korean: "English Immersion" debate. In T. M. Prior, Y. Watanabe & S.-K. Lee (Eds.), *Selected proceedings of the 2008 Second Language Research Forum* (pp. 246-260). Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.

Llanes, À., Arnó, E., & Guzman, M.-B. (2016). Erasmus students using English as a lingua franca: Does study abroad in a non-English-speaking country improve L2 English?. *The Language Learning Journal, 44*(3), 292-303. doi:10.1080/09571736.2016.1198099

Norton, B. (2013). *Identity and language learning: Extending the conversation*. Bristol, UK: Multilingual Matters.

Pavlenko, A. (2007). Autobiographic narratives as data. *Applied Linguistics, 28*(2), 163-188.

Pavlenko, A., & Blackledge, A. (2004). Introduction: New theoretical approaches to the study of negotiation of identities in multilingual contexts. In A. Pavlenko & A. Blackledge (Eds.), *Negotiation of identities in multilingual contexts* (pp. 1-33). Clevedon, UK: Multilingual Matters.

Piller, I., & Takahashi, K. (2006). A passion for English: Desire and the language market. In A. Pavlenko (Ed.), *Bilingual minds: Emotional experience, expression and representation* (pp. 59-83). Clevedon: Multilingual Matters.

Polanyi, L. (1995). Language learning and living abroad: Sotries form the field. In B. Freed (Ed.), *Second language acquisition in a study abroad context* (pp. 271-292). Amsterdam: John Benjamins Publishing.

Polkinghorne, D. (1988). *Narrative knowing and*

the human sciences. NY: State University of New York Press.

Simic, M., Tanaka, T., & Hasegawa, Y. (2011). Usage of Japanese as a third language among international students in Japan.『留学生教育』11, 111-125.

Shin, H. (2014). Social class, habitus, and language learning: The case of Korean early study-abroad students. *Journal of Language, Identity, and Education, 13*, 99-103.

Stark, P. P. (2009). No Joke – This is Serious!: Power, solidarity and humour in business English as a lingua franca (BELF). In A. Mauranen & E. Ranta (Eds.), *English as a lingua franca: Studies and findings* (pp. 152-177). Newcastle, UK: Cambridge Scholars Publishing.

■**謝辞**　調査に快く応じてくださったキムさんにお礼申し上げる。

Literacies, 22(2), 82-98. (2018). Kurosio Pub. Co., Ltd.

Research Paper

I don't need Japanese anymore if I can speak English perfectly

Japanese versus English in a study-abroad program in Japan

NAKAYAMA, Akiko*

Abstract

These days, it seems that many international students at Japanese universities prefer to invest their time and energy integrating themselves into English-speaking communities rather than Japanese-speaking communities even though they are fluent in Japanese. Why do they prefer to communicate in English in Japan when they are perfectly capable of communicating at a high level in Japanese? To understand this phenomenon we examined the life story of a Korean male exchange student in Japan and the identities he constructed in his English-speaking circle of friends and contacts and in his Japanese-speaking circle. We found that he preferred speaking English at least in part because it was a widely spoken lingua franca that he could speak without worrying about making grammatical mistakes and breaking rules. In contrast, the identity he constructed in his Japanese-speaking community was constrained by concerns about making mistakes and failing to follow Japanese rules. These differences help explain why he chose to put his energy into integrating himself into an English-speaking community rather than a Japanese one. Our findings suggest that more research is needed on the topic of which language students speak in multilingual campus settings and what can be done to make them feel more comfortable speaking Japanese.

Keywords

international student, study abroad, life story, identity, lingua franca

* Hiroshima University
E-mail address: akknkym@gmail.com